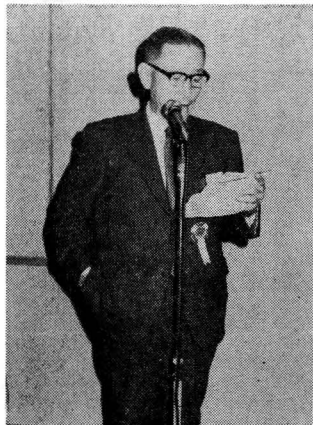




年次晩餐会で挨拶する今西会長

褒賞、桑原武夫、篠田軍二、西氏の勲三等と本会の発展に多大の貢献をされた中原繁之助氏の名譽会員の推挙が伝えられた。病氣欠席の中原新名譽会員に代って津田周二氏(評議員)が今西会長より満場の拍手の中に名譽会員章を受領した。

以下は、「山岳」会員

昭和四十九年度年次晩餐会

恒例の年次晩餐会は、本年度は十二月七日午後六時から京王プラザホテル四階花の間で開催され、出席者は会員三十九名、招待者三名、非会員一名、合計四十三名におよび広い会場も満員の盛況であった。開会にさきだて午後五時より例年のように控の間では「この一本展」と簡易バーが開かれ早々より会員であふれ、スコッチを片手に談笑する人々、会員有志がもち寄った「この一本」を見入る人たちで一杯であった。

晩餐会は定刻六時よりJ.A.C.の会旗の飾られた大広間に席を移し、名司会者、板倉常務理事によって開会。まず今西錦司会長が「今年も年次晩餐会がめぐってきて、大変嬉しいと思う」と挨拶されてきて、大変嬉しいう。会務報告の内容は、会員数の発表十一月末の在籍会員数三、一六一名、神谷名譽会員はじめ十二名の物故者の氏名発表と黙祷。心から物故会員に対して哀悼の意を表したあと、秋の生存者叙勲者、三田幸夫前会長の紫綬



昭和50年(1975年)
1月号(No. 355)
社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

定価一部 100円

目次

行事・委員会

- 昭和49年度年次晩餐会……………小倉 厚…(1)
- 新名譽会員紹介 中原繁之助氏……………津田・望月…(1)
- 年次晩餐会出席者名簿……………(2)
- 様会年次だより……………茶谷東海…(2)
- 放談会(会員会議)報告……………集委会員…(3)
- 丹沢集中登山印象記①……………河野幾雄…(5)

本文・紀行・随想

- 木暮理太郎没後30年慰靈ミサに参列して……………神原忠夫…(3)
- 会津の山③「飯盛山」……………市村貞夫…(4)
- 六月の火打山……………松家 晋…(6)
- 華練登山団の来日に寄せて……………沼倉寛二郎…(7)

追悼

- 近藤実氏……………越田和男…(2)
- 佐藤達夫氏を惜しむ……………島田 巽…(4)

海外情報

- ラムジュン・ヒマール登山隊報告……………日本ヒマラヤ山岳協会…(2)
- インナーラインの制限緩和……………松田…(7)

図書紹介

- かんあおい……………今井雄二…(7)
- 登高行第17号……………山崎安治…(7)

その他

- 会告……………(3)
- 小集会のお知らせ……………(3)

名簿「山日記」の発行、山岳研究所の状況、海外登山関係、七十年記念事業(検討中)、会費の値上げなどであったが、とくに諸物価高騰の折、上高地山岳研究所の赤字分五〇〇万円の再募金と会費の値上げに対して今西会長は、会員各位に一層の協力を強く要請された。そして、最後は本日の招待者、利根川政次氏(山研管理室)の三名の紹介が拍手の中に行われた。

以上で今西会長の会務報告が終り、ついで会の隆盛と会員の健康を祈り、日高信六郎名譽会員のユーモアあふれる音頭によって賑やかに乾杯。晩餐に移った。

会員談笑のうち、司会者より指名され、女子エベレスト遠征隊を代表して田部井淳子副隊長がつかの間に抱負を語った。

「みなさまのご支援により一月下旬本隊が発進できるようになった。帰って登山をしたい。」

ついで、輝かしい業績を果した女子マナスル登山隊長黒石恒氏は「成功はしたが、事故を起して申し訳なかった。来年のエベレスト隊の成功を祈ります。」と挨拶した。

さらに、一九七六年四月～六月に計画されているナンダ・デビについては鹿野勝彦氏、エベレスト南壁隊については宮下秀樹氏がそれぞれ抱負と予定について(「山三五一号参照」)の話が披露された。

このような会員各位の元気な談話が続き、午後八時過ぎお開きになり、おのおの新しい「山岳」と「会員名簿」を手に夜の新宿の街に散っていった。しかし、例年お元氣な姿をみせる横・藤島(敬)両名譽会員、成瀬永年会員と今回名譽会員となられた中原さんが病気が事故のためお顔と声が聞かれなかったのは一寸と淋しい気がした。

最後に、今回の会場の設営にあたってみなみなならぬご尽力を賜った山崎評議員、伊倉常務理事、事務局の方々をはじめ関係各位に対し厚くお礼を申し上げる次第である。(小倉厚)

新名譽会員紹介

中原繁之助氏

明治三十五年(一八九二)六月誕生八十二歳、三高を経て京大機械科を大正八年(一九一九)卒業。明治四十四年(一九二一)四月、加賀正太郎氏の

紹介で日本山岳会へ入会。会員番号二六七番。中原家は大阪の素封家で、鴻池家の分家にあたり、さらに中原家の分家に榎谷家がある、本会員榎谷徹蔵氏(故人)が中原氏の登山の手引きをした。大正十三年(一九二四)の早期に榎谷氏と阿寒、屈斜路湖、摩周湖を歩いている。

大正十三年 R.C.C.創立者の一人となる。大正十四年(一九二五)二月～十五年一月、ヨーロッパ留学、その間欧州アルプスを訪れ、グリンデルワルトを中心に歩く。大正十三年頃中村盛文堂(印刷会社)の出資重役となり「R.C.C.報告第二輯」(昭和三年刊)は、その出版にかかわる。その後黒百合社(出版社)を設立実弟中江喬之氏を責任者としたが、実際はほとんど中原氏が運営し、藤木九三氏の「屋上登攀者」その他、三木高孝氏の「山岳征服」水野祥太郎氏の「岩登り術」「山野スキー術教本」P・パウアー・伊藤忠氏訳の「ヒマラヤに挑戦して」等数多くの山岳図書を、採算をかせみず出版した。

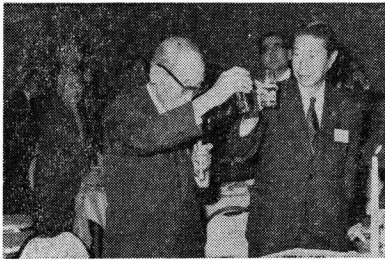
R.C.C.の初期には兵庫県の岩山、雪彦山の開拓者の一人であり、岩登り、スキー登山も実践した。昭和十年(一九三二)一月日本山岳会理事となり、昭和十年(一九三五)九月関西支部が大阪に創設されるにあたっては、その推進者の一人として尽力した。その後しばしば理事あるいは評議員として会務にたずさわり、現在関西支部ではもっとも会務に尽くした長老の一人である。現在永年会員。

昭和四十九年(一九七四)十一月九日開催の評議員会で満場一致をもって名譽会員に推薦された。(津田・望月)

年次晩餐会出席者名簿

会員 網藏志朗、穴田雪江、安彦六郎
青木昇、青木重夫、青木一夫、今西錦
司、井上博、伊倉剛三、岩瀬浩、板倉
勝正、伊藤信夫、今岡義夫、今井田研
二郎、伊藤秀五郎、今井嘉道、岩永信
雄、入沢郁夫、稲垣一郎、石坂昭二
今井善美子、今井雄二、岩佐吉雄、岩
崎三郎、石田要久、飯田進、宇田正治
遠藤光男、小島守夫、小倉厚、荻野恭
一、小方全弘、大倉昌身、大倉寛、大
沢伊三郎、折井健一、大野俊夫、大塚
博美、大森薫、織内信彦、岡部みち
子、太田敏、小野敏之、小原勝郎、大
野栄二、加治甚吾、勝田房治、鹿野勝
彦、加納一郎、片岡博、川北仁、金坂
一郎、門倉賢、川森左智子、亀田与三
次、神原忠夫、河村孝二、風見武秀、
笠原正明、菅野弘章、菊地文雄、木村
真、木村勝久、北島光子、北林嘉鶴子
北村節子、久保利夫、黒石恒、隈部恵
子、見学玄、近藤恒雄、越田和男、河
野幾雄、小林猛臣、後藤幹次、近藤信
行、小林重一、小池新二、佐藤テ
佐藤佳年、佐藤久一朗、斎藤健治、斎
藤かつら、佐藤彦彦、沢村幸蔵、横井
信雄、坂本幹、酒井吉国、新貝勲、鴨
原啓佑、島根康郎、柴田均二、篠繁市
城谷一誠、進藤波男、柴田蔵太郎、島
田翼、清水信郎、清水春美、住吉仙也
鈴木昭、鈴木清、周布光兼、鈴木重
美智子、関根吉郎、関口周也、瀬名貞
利、高山忠四郎、田部井淳子、高橋定
昌、竹田寛次、丹部節雄、高橋照、高
橋憲二、谷口現吉、田口二郎、高田真
哉、田村扇一、高遠島、伊達篤郎、高
頭祥八、宅間清子、瀧島清、田畑真
田村俊介、高木碩男、茶谷東海、千葉
重美、千葉保之、辻狂一、津田周二、
椿シヅ子、徳久球雄、徳永芳雄、外山
義夫、鳥居亮、中屋健武、中川恵實、

中河与一、長尾佛夫、中野征紀、奈須
文枝、中保、名須川浩、中村進、中島
伊平、中川武、中島信一、西丸震哉、
沼倉寛二郎、野口未延、早川義郎、浜
野吉生、浜田一馬、原審、原田幹市、
林和夫、羽田栄治、浜野正男、原田達
也、原真、原謙一、高山善吉、広島三
郎、平山武志、日高信六郎、平野隆司
平沢亀一郎、平岡誠一郎、広羽清、福
井正吉、二本信次、深田志げ子、藤井
運平、藤島玄、福田文二、船越好文、
藤田佳宏、堀田弥一、堀内章雄、堀口
丈夫、堀川英司郎、松家晋、松丸秀夫
松永敏郎、松田雄一、牧野四子吉、牧
野文子、松井展弥、宮下秀樹、水野公
男、三田幸夫、宮森常雄、村上勝太郎
村田恭邦、武藤晃、村尾金二、森川洋
佑、望月達夫、山崎金次郎、山下久男
山野井武夫、柳宏子、山田哲郎、山崎
安治、山口健治、山本朋三郎、山村正
光、山本良三、湯浅道男、湯川龍二、
尹宜炳、横山厚夫、吉阪隆正、吉沢一
郎、芳野菊子、吉武正子、吉村健児、
吉田久兵衛、脇坂順一、渡辺義雄、渡
辺正臣、渡辺公平、渡辺兵力、和久井
正明、招待者 利根川政治、津村蒼治
津村はるの、非会員 佐々木達海



乾杯の音頭をとる日高名譽會員

ラムジュン・ヒマール 登山隊報告

日本ヒマラヤ山岳協会

東稜からの新登頂に成功

十月二十日、二十一日
「菊地・植竹の二名です。よく聞いて下さい、ただいま十五時三十分、ラムジュン・ヒマールの山頂に到達いたしました。了解でしょうか。」
一九七四年十月二十日ラムジュン・ヒマール山頂からB.Cのトランシーバーに飛び込んできた第一声です。
一年余の歳月と、さまざまな問題を乗り越えてきたH.A.Jのラムジュン・ヒマール登山隊は、いまその目的を達成することができました。これも会長をはじめ会員の皆さま方、その他数多くのひとびとのご尽力、ご協力の賜物と改めてお礼申しあげます。
(十月二十二日B.C発信。山倉隊長からの手紙原文)

第三キャンプの建設(六、〇〇〇m) C2をコル(五、八〇〇m)に設置

したのが十月六日。C2から上部は非常に急なせ尾根で、十四日までに五、九四〇mまでルートを開いたが、その上の水壁が手強く、南面の困難なトラバースルートで突破し、十六日にC3を設置した。六、〇〇〇m地点である。さすがに下半部は厳しく、テント場を見えだすが困難であった。
頂上攻撃、二度にわたって登頂に成功
十月二十日午前五時、C3を出発した植竹清孝、菊地薫の両隊員は、上部の意外な深雪のラッセルに苦労しながら十時間半の行動の後午後三時三十分頂上に立った。頂上は快晴で、アンナブルナ2、マチャブチャレ、マナスルなど、周囲のすべての山々が目に見えた。頂上は意外とゆるやかで平坦であ

った。二十日に設けた仮C4から第二次アタックとして安倍泰夫、大崎正信の両隊員とサードのロブサン・ツェリンが出発し、午前十一時に登頂した。頂上は厳しい強風と寒さで五分と止まっておられない状況で、風の音がB.Cのトランシーバーにゴウゴウと入っていた。
徹収
第二次アタックの日から吹き始めた強風は止まず、天候が悪化し、二十二日の夕方から雪がちつつき、夜半にはB.Cにも降り始めそのまゝ回復せず、二十四日は本格的な降雪となった。まさにラストチャンスだったわけである。メンバーは二十五日に全員B.Cに帰着、主要装備は大半回収することができた。一ヵ月余荷上げルート工作のすべてを自分たち少数のメンバーでやるを得なかった隊員たちに疲労の色は隠せないが、全員元氣である。

近藤 実氏

昭和四十九年十一月七日、広島県竹原市の自宅にて心筋梗塞のため逝去。享年五十九歳。三井金属工業㈱竹原製煉所病院長。昭和初期、甲南高校山岳部時代に主として北アルプスで活躍された。鹿島槍東尾根(積雪期)・前穂高四峰バットレス(甲南ルート)・白馬鍾南山(積雪期)の初登攀等の山歴がある。
本会会員ではないが敢て筆を執ったのは、旧知の方もあろうかと思つたのとは別に、やや因縁めいた偶然があったからだ。実は先日、上高地の山研を訪ねた小生と山崎安治氏との談笑のなかで、たまたま日本山岳会図書委員会が来春予定している旧制松高山岳部の人たちの話を聞く会のことに話がおよび、昭和の初期の北アルプスで松高の対抗馬的存在であった甲南のオールドクライマー諸氏にも出席してもらえたらとの話になり、近藤実さんの名前がでたのだ。山崎氏が近藤実さんの名前を憶えておられたのにもびっくりしたが、その三日後の朝、勤め先に田口二郎氏から電話があり「近藤がね、今朝死んだんだよ」にはもともとびっくりさせられた。田口さんとは無二の親友だったと聞く。

梓会年次だより

茶谷 東海

昭和四十九年における梓会の行事を報告するにあたり、左の事項をお願い申し上げた。すなわち田部重治名誉会長亡きあと、梓会は従来どおり日本山岳会のご指導を得て、今後も会員二〇〇名の懇親を主とするハイキング

ある。

会長 海経六期 等松農夫蔵

副会長 海経十一期 新井 克己

同 陸士出身 浦野寿一郎

同 婦人代表 近藤 衣重

代表幹事 海経十三期 茶谷 東海

一、追悼会

八月四日(日)正午水交会にて田部重治

名譽会長、紺野逸弥前会長および山田

寿吉創立会員の追悼会を開き、ご遺族

の田部和(孫)、紺野利弥(長男)および

萩原益子(長女)の三氏を招いて、

茶谷幹事、新井副会長および堤恭二復

活会員が遺影を前にしてそれぞれ三人

の追悼談を行ないかつ遺品数十点を展

示した。会する者、日高元日本山岳会

長、朝井防大山岳会長、川上防大山岳

部監督、山田防大ワンダーフォーゲル

部コーチ、進藤日本山岳会員をはじめ

梓会より三十一名の盛会であった。

二、家族向奥武蔵丘陵ハイキング

四月十四日(日)、二十一日(日)の両

上高地山岳研究所募金状況

△会 員 応募件数 四九八年八月

応募金額 四六三四、〇七三円

目標対比 九二・七%

△一般 応募件数 六件

応募金額 二七八、〇〇〇円

目標対比 二七・八%

△応募者氏名 四九・八

玉井康雄3、西沢健一5、高山

忠四朗30、曲義則5、三鍋久雄

3、森下靖夫1、金子心一3、

小島栄10、三上正治3、市川次良

5、森下靖夫1、松丸秀夫10、

沢井貞夫6、豊島義明10、菊地修

身5、福田宏年10、安川茂雄10、

人懇談会13、川崎精雄2、神崎忠雄

追10、加納蔵6、太田義一3、越田

和男4、沢村幸蔵2、小岩清水5

日、小中学生を含む三十五名が二班に

分かれて高麗駅一日和田山(三〇五m)

―物見山(三七五m)―鎌北湖―東毛呂

駅の丘陵を歩いた。参加者は防大より

朝井、長谷川、山田、鈴木、OBおよび

学生数名、はじめて会員となったド

クター保利の各氏等て春ののどけさを

満喫した。

三、伊豆ピクニックコースハイキング

長谷川防大ワンダーフォーゲル部長

の計画により、山田同部コーチをリ

ダーとして、十一月十七日(日)伊豆高

原駅―大島根―祖谷、祖師堂―蓮華寺

―海洋公園―城ヶ崎―ぼら納屋(寛永

年間創建)―伊東駅のコースを三時間

歩いた。参加者は前夜大田区立伊豆高

原荘で泊った三十五名に防大ワンデル

部より二十二名が加わり、ぼら納屋で

の屋敷では朝井防大山岳会長の挨拶に

より懇親会が開かれ、学生の合唱、独

唱、軍歌、踊りなどで三時間を過ごし

た。この散歩道は箱根の旧街道に似た

石畳で海岸の奇岩探勝にはもってこい

である。

四、少数グループの登山

富士山、安達太良山、岩手山、岩木

山、蔵王龍野岳とお釜一周、比良蓬萊

山、伊吹山、榛名掃部岳、子持山。

五、明五十年の行事予定

(1)梓会創立六十周年記念祝賀会(五

月十一日)

(2)谷川岳記念登山(八月二日、三日)、

天神尾根―頂上―西黒尾根コー

ス。

(3)鷹取山家族向ハイキング(十一月

十六日)、記念艦三笠および防衛大

学を見学する。日本山岳会の各位

のご参加を歓迎する。(49・11・23)

放談会(会員会議) 報告

日時 十一月二〇日(水)六・三PM

場所 日本山岳会ルーム

出席者(順不同省略) 伊倉、鹿野、板

倉、山崎、網蔵、田辺、堀内、小林

近藤、桐生、勝田、小原、田村、大

倉、飯田、広島、井口、神崎、東原

西奥、福島

司会 井口邦利(集委会員)

主催の集委会員会担当理事、神崎氏

より、昨年度のアンケートから山岳

会の諸状況、考え方などの説明にはじ

まり、おのおの三分間放談で今日の論

すべき方向づけをしながら進行した。

日頃山岳会に対して思っているこ

と、意見、不満などを含め、会員の感

じたままの声が届いた。できればそ

の中から集委会員会としてならんか

の活動方向に指針的なものをみだし

いと思ひこの会をもった。ふだん、会

員の意見が反映されていない、新しい

員での機会がないという噂の声を聞

く割には会の上り下りがなかった。

集委会員会のPR不足か、会員各目

意識の低下なのか……いずれにせよ山

岳会の衰退につながる故、自分

たちの山岳会を考えたとき、みんな

がもっと真剣にならなければならな

いではないかと直感的に感じ、集委

員として責任を意識せざるを得な

た。

内容としては、ルームの在り方、た

えばサロンのもの、それに対する

条件的なもの、会員としての権利と義

務的な会員の意識の啓発、運営活動に

関してのおのおの考え方など意義あ

る意見もだが時間切れという感じでも

のたりなきもあった。

山岳会の運営の中で会員の立場から

意見を述べられる機会の少ない中で、

このような会には会員の方からも上

げ、より多くの会員の意思が反映さ

れた会の運営を理想に考えたい。

木暮理太郎没後三十年

慰霊ミサに参列して

神原 忠 夫

昭和十年から亡くなった昭和十九

年まで、九年間にわたって本会の会長

をつとめられた木暮理太郎氏(一八七

三―一九四四)の、今年はちょうど没

後三十年に当たる。また、夫人(終身会

員だった)は昨年十月十日に亡くな

ったので、今年はその一回忌に相当す

る。これらに関連させて木暮家では亡

なられた家族の霊を慰めるためのミサ

を、吉祥寺のカトリック教会聖堂で執

り行われた。聖堂といっても中に入

てみると厳格な感じはなく、明るい

現代風にマッチした内装が施されて

いて、ホールといった感じである。聖

壇の前には木暮理太郎夫妻、長男の岳

氏、および次女の緑さんの遺影が飾

られ、菊の花が飾られていた。木暮

さんの写真を見るとき、例の有名な髯

がかなり白いので晩年のものかと思

われる。昭和十八年に東京市が東都

になった時、市役所の前で撮られた集

写真の中に木暮さんの姿をみたが、同

じような髯をしていたからこの頃の

ものである。岳彦さん(一九一四―

一九四五)の写真は、ガッチリした青

らしい姿から、やはりこの頃のものと

思われる。岳彦さんは父君の葬儀を

済ませた直後軍の召集令状を受けて出

征し、翌年三月には硫黄島で戦死され

ている。神谷恭さんの話は、「お父

さんに似てたくましく体格の立派な青

年」だったそうである。つぎの緑さん

(一九一九―一九三三)は満十五才と

いう若さで病没されているが、やはり

神谷恭さんが「いい子だった。」と洩

した短い言葉の中に、緑さんの人柄

が偲ばれたのをいまい思ひだす。

神父さんの聖書朗読の間、私の頭の

小集会のお知らせ

集委会員会

第三二八回 左記により青山学院

大学ヒマラヤ遠征報告会を行います

ので、万障お繰り合わせの上、

ご参集下さい。

日時 2月20日(木)PM 6・30

場所 日本山岳会ルーム

報告 青山学院ヒマラヤ遠

征隊隊長 戸張至聖氏

スライド上映

第三二九回 本年度入会された方

を対象に山岳会の現状を知って

いただくともに、会員としての心が

まえをもつていただく意味におい

てガイダンスを行います。新会

の出席を切望いたします。

日時 3月20日(木)PM 6・30

場所 日本山岳会ルーム

内容 日本山岳会に関してオリエ

ンテーション

中では昨年以来の木暮理太郎調査につ

いての思い出が駆け廻っていた。オル

ガンが聖歌六十八番を奏し私たちもそ

れに和して歌う。今では唯一人の遺族

となられた美枝子嬢を先頭に、白いカ

ーネーションが写真の前に献じられ

る。ミサが終つてから小宴が開かれ、

私は木暮さんの実弟の長男でいらし

る利夫氏と同席、木暮さんの故郷で

ある神戸村の話をたづねうかがつ

た。高村光太郎製作の木暮理太郎像

なども話題になって賑やかだったが、参

集した人のおとどけが木暮夫人の野田

家につながらなかったのだ、一寸寂

しい気もした。

因みに、木暮家のお墓は多摩墓地の

二十二区一種四〇側にある。墓碑は木

暮さんが昭和十三年九月に建立したも

のである。

佐藤達夫氏を惜しむ

島 田 巽

佐藤さんの入会は昭和四十年五月、会員番号五九一九で、会歴は十年に満たない。しかし、なにかきっかけがあったら、もっと早く入会されていたに違いないと思う。はからず私が同じに役所に奉職することになったのを機会に、早速すすめたところ、一月もたたぬうちに入会を申込まれたのをみて、も、そうだったろうと想像される。

佐藤さんは法制局長官とか、人事院総裁という役柄でありながら、多くの趣味に生き、さらに専門の域にまで達するといふ多芸多能の人であった。とくに植物愛好など、植物分類学の研究としても、専門的に認められていたことは、周知のとおりである。私は、日本山岳会の創成期には、日本博物同志会などの熱心な植物愛好家を中心となつて活躍したことを話して、入会をすすめた手前、紹介者には、松方さんとともに、武田さんをお願いすることにした。いま、その入会申込書を見ると、植物学界に大きく寄与されたご二人の署名が残されていて、感慨をあらたにする。

佐藤さんの山行については、大正七年、中学二年のころ、父上にもなわられて白馬に登ったのが最初で、以後、北アルプス、八ヶ岳、木曾駒、御嶽、九州の諸峰その他を学生時代に登るとか、近年は奥多摩、秋川溪谷あたりへの月一、二回の植物探索などへでかけたことが、申込書に記されている。息の長い山とのつき合いであり、深く暖かな愛情をもつての自然とのつき合いであったことは、一昨年刊行の「自然の心」（毎日新聞社刊）によく語られて

ている。その文章とともに、植物写生図もすぐれたもので、それらの画集のあることは、多くの人の知るところで、佐藤さんは新著がでるたびに、本会へ寄贈されるのを常とされた。

数ある貴重な植物標本のなかで、佐藤さんが宝物として愛蔵されていたものに、本会創立発起人のひとり城数馬氏が明治三十五年夏八ヶ岳横岳で発見、採集されたツクモグサの標本がある。これについての詳細な記事は「山岳第六十二年」に「会員第一号城数馬氏のこと」と題して、藤島敏男によって記されている。

こうした因縁をみても、佐藤さんは、ずっと以前から本会に関心を抱かれていたのではないかと思われ、心からその逝去が惜しまれるのである。

会津の山③

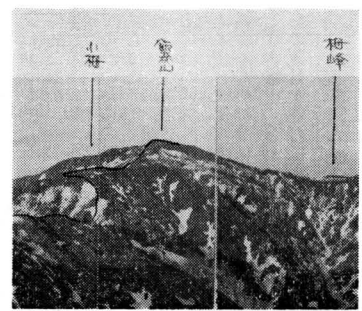
「飯森山」

越後支部

市村貞夫

飯森山は羽越三角網一基本点、飯豊山から東へ延びる国境線線上、吾妻火山群の西端大峠一、一五〇m「旧米沢街道」と磐梯朝日国立公園、飯豊地区谷地帯とのほぼ中間点にあり、行政的には山形県西置賜郡飯豊町と福島県麻郡熱塩加納村との境界線上に位置している。

水系は阿賀野川に属し、押切川の源頭であり、本川上流より大谷沢本流、飯森沢（地元ではエイモンザウ）、鉢伏沢、大蔵沢の四支溪をもつ山である。地形的には谷はV字を構成し奥深い。山体は低山であるために全体的にやぶつぽくアルペンムードには一寸欠ける。しかし春山の残雪期、紅葉期には



会津にある著名な二、三〇〇m級の山々と同等の山の良さをみせる。また飯森山は沢をもっているのが強みである。大谷沢は中流部より上流部にかけて、大谷沢には岩盤が露頭しており、流送された礫石の巨石がごろごろしている。飯山キャンプ地から上流には大谷合せて十箇所ばかり滝があり、いずれも名称がある。紅葉期の沢登りについても紹介したいが、次回にルートを発表したい。山体は急斜面であり土被りがうすく、植生は良くない。中腹部にはブナの原生林があり目を見張るものがあり他にダケカンバ、ナナカマドなどが混交している。頂上付近にはオオシラビシがあり、山の景観を一段と美しくしており、対岸の野田沢川支流三河沢源頭の裸岩帯には姫小松が数多く点生しており、山の花では一段と目立つのがヒメサユリ（地元で乙女百合）であり、群落が多い。沢の流れも河床礫がみえる位にきれいであり、岩魚の泳ぐ姿も何回となく沢登りコースではみられる。野生動物も数多く棲息しており、その中でも今年の残雪期の融雪出水時にカモシカの死体が発見され、山男として何か悲しいような気がした。自然環境、自然景観が自然的か

人為的かは判断できないが、自然破壊が目立っている。野生動物の保護政策をとり一辺的なものでなく広大なる視野に立って関係機関は行政指導をやつて頂きたい。

山の紹介をやっているのですが道に迷ったようである。原点に戻りまして、「飯森山」は会津若松市街地より望むことができ、三角錐の独特の山姿をみせて、隣東の高曾根山とは対照的である。この山も一部岳人からは「日中飯森山」と呼ばれ親しまれているが、交通不便と頂上までのアプローチの長いのがたたり、一般登山対象として本山を訪れるのは稀少である。しかしこの山も中央の名のある精神的な山岳会や、大雪山山岳部が新人訓練の山として、春夏秋冬と入山しており、近年に至りますます多くなつてきたようです。本会の大長老の方々の来山もあり、「日中飯森山」はどこへだしてもヒケを取らない会津の山となりました。

また、飯森山は地元民の生活の場の山で、国有林事業で働き、またはワラビ、キノコ、ゼンマイ、タケノコなどの山菜の宝庫でもあり、十月末頃まで山仕事に精をだしている。

山頂飯森神社には大山紙を祀り、鉢伏山に鉢伏神社、大倉山に大倉神社があり、地元民にとっては内神様であり、その信仰心も厚く、今年とれた生産物を奉納し心くる年の豊作を祈願するといふ。いずれの神々も百貨店のような何んでも屋さんらしい。これから推測すると信仰登山的なニアンスがあり、藤島玄越後支部長が書かれた「山三三四号一飯豊山」との関係に何かつかるかわからない。現在古文書、史談家から情報を集録しているの、いずれ藤島支部長に総合解析をお願いするようにしたい。最後に国立公園地域指定に当りGHQの命令により取残された飯森山



も熱塩加納村長の手により昭和四十一年十五年にかけて十七キロの新ルートが開設されその名も「岩羽国境線ルート」としてデビューし現在に至っている。第一回の開通式には藤島支部長が参加された。飯森山は完全に飯豊連峰と接続し、孤立した山でなく飯豊連峰の一部となり、吾妻火山群への基点ともなった重要な拠点山岳である。

山麓には僧安海が開湯したと伝えられる温泉があり、この湯は新婚早々の夫婦がともに湯につかれれば子供がでると伝えられ、近在はもちろん県外からの若夫婦が温泉地を訪れて。近くに示現寺、数多く石仏がハイキングルートに立並ぶ弘法山があり詩情豊かな地である。これもことし位でこの飯森山塊にも文明が押し寄せて大谷沢本流にはダムが築造され「日中飯森東北農政局」五〇年度では「二一」号線「旧米沢街道」が工事着手になるらしい。

ダム、道路が整備され別な観光資源が誕生し、新興観光地となるのは近い。これら人為的な自然環境が変化しないうちに、飯森山に登って頂きたい。下山時に一夜をとり湯舟に体を休めて、山菜料理、岩魚、地酒に舌を打てば、会津の山旅の良さがさらに良いものとなることはまちがいない。先輩

会 務 報 告

十一月理事会

(十一月八日午後六時ルーム)

出席者 今西会長、中屋、織内副会長、板倉、伊倉、松丸、大倉、丹部、田村、浜口各理事、山崎、金坂各常任評議員、高遠、三枝各委員、委任近藤、宮下、浜野各理事、佐藤評議員

議案

・酸素補給用エコノマイザー装置特許認可の件 (伊倉)

四五年二月十七日に依頼したものが、四九年十月二十八日認可の通知がきたので、一応発明者と相談の上、今後の処置について決定することにした。

・会報担当者後任の件 (板倉)

現在の会報担当者が仕事の都合で続けられなくなりそうなので、年内に適任者を選出したい。連絡は板倉、伊倉理事まで。 丁承

報告事項

・三田前会長紫綬褒章授賞について (伊倉)

本会より推薦して、授賞が決定した。

委員会報告

・山研 (伊倉)

十一月五日に閉じた。六月から十月までの利用者は会員一四六人、非会員一〇五人、計三五一人で、予定より少なかった。山研建設費の不足が五〇〇万円ほどあるので、再募金をする。

指導

十一月七日に各大学山岳部の監督会議を開く。

山岳

十一月下旬にはでき上がる予定。

山日記

十一月末でき上がる予定。一部九五〇円

・青年懇談会 (大倉)
十月十五日に第一回インドヒマラヤ研究会を開催。第二回は十一月十九日。十月二十日丹沢集中登山を実施。参加者四十名。

・U I A A会議(ユーゴ)に牧野文字氏出席。来年はオーストリ、再来年はスペインで開催される。

十一月評議員会

日時 昭和四十九年十一月九日午後一時〜午後三時

場所 第三利根川ビル七階会議室

出席者 今西会長、中屋、織内副会長、山崎、望月、金坂常任評議員、渡辺、林、津田、村山、藤井、藤島(玄)佐藤、島田、大塚、堀田各評議員、委任 田口、小原

今西会長よりあいさつあり、島田評議員議長となる。

報告事項

①会務報告(織内)

山岳、山日記、会員名簿いずれも十一月に発行する。山岳は大変おくれ申しわけない。山岳と会員名簿はともに発送する。来年は創立七十周年なので、記念晩餐会を十月十四日の創立記念日に開き、東京、大阪で記念講演会を一般山岳愛好者を対象に開く。七十年のJ A Cの歩みの歴史に、七十年の山岳名著復刻、各支部での行事、記念品など目下記念事業委員会検討中である。

②山研の件報告(林)

本年度山研の件につき報告あり、不足金五〇〇万円は会自体の問題として考慮してほしいと表明する。

議事

①会費値上げの件(織内)
東京近県の会員の年会費を五千円か

ら八千円、その他の県三千五百円を五千五百円、または六千円、入会金七千円を一万円、または一万二千円の案について検討しており中房での支部長会議などでの会員の声として値上げもやむを得ないとしているが、それに応じた。結局近県の会費の年会費八千円、入会金一万二千円案を了承、理事会、総会にはかつたうえ、定款の変更を文部省に申請することにする。

②名誉会員推薦の件
中原繁之助氏を満場一致で推薦し、十二月七日の年次晩餐会で発表する。

ルーム日誌 (49年11月)

5日(火) 集委員会
6日(水) 学生会
7日(木) 常務理事会
8日(金) 指導委員会
9日(土) 理事會
11日(月) 山研委員会
12日(火) 青年懇談会
13日(水) 自然保護委員会
18日(月) 図書委員会
20日(水) 七〇周年記念行事委員会
25日(月) 第三十四回小集會 會員會議「放談会」
26日(火) 青年懇談會
十一月中来室者 四三八名

會員異動

除籍取消
五五五 土肥 正毅
六四八 徳田 憲正
改姓
七六九 坂本 美弥 旧姓星山
物故會員

六二六 坂本 肇 昭和四九・八
・三〇逝去
四一三 山口季次郎 昭和四九・一
〇・一七逝去
六五八 七 小俣 武男 昭和四九・一
〇・二二逝去
一五四 福田嘉四郎 昭和四九・一
一・一〇逝去
五四二 伊藤英三郎 昭和四九・一
一・二一逝去

(第七回山岳図書交換会)

主要出品目録

出品名	価格	出品者
わが愛する山々(深田久弥)	六〇〇	山崎
単独行(加藤文太郎)	六〇〇	山崎
山に入る心(田部重治)	二〇〇	山崎
インディオの秘境(藤木高嶺)	三〇〇	山崎
白い地獄(バウロ・シュルテ、東北沢訳)	三〇〇	山崎
孤高の人(上・下)(新田次郎)	五〇〇	山崎
高みへの序曲(安川茂雄)	三〇〇	山崎
山への祈り(安川茂雄)	三〇〇	山崎
凍てる岩肌に魅せられて(小西政継)	二〇〇	山崎
私たちのスキー(猪谷六合雄)	一〇〇	山崎
山の組曲(瀬名貞利)	七〇〇	山崎
山(モルゲンターレル、荒井道太郎訳)	一〇〇〇	山崎
氷壁(井上靖)	三〇〇	山崎
山に忘れたパイプ(藤島敏男)	二〇〇	山崎
山の出せ(畦治梅太郎)	八〇〇	山崎
第一次・第二次エベレスト偵察隊報告書(日本山岳会)	一五〇〇	山崎
エベレスト登山隊報告書(日本山岳会)	一五〇〇	山崎
山と民俗(高橋文太郎)	八〇〇	山崎
秘められたる山旅(エーデルワイスクラブ)	三〇〇	山崎
登頂ゴジンバカン(明治大学山岳部)	三〇〇	山崎
峰・峠・氷河(藤木九三編)	八〇〇	山崎
忘れ得ぬ山(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)(串田孫一編)	一五〇〇	山崎
夕映えの山頂(串田孫一)	一四〇〇	山崎
評伝・拾遺・増補 松浦武四郎(吉田武三) 三冊揃	一八〇〇	山崎
岩と雪の歌(秋谷豊)	四〇〇	山崎
深山久弥山の文学全集(Ⅲ)・(Ⅳ)(深山久弥)	各一〇〇〇	山崎
山頂の憩い(深山久弥)	五〇〇	山崎
私の中の一つの詩(串田孫一編)	二〇〇	山崎
間宮林蔵(瓜生卓造)	三〇〇	山崎
極北に駆ける(植村直己)	五〇〇	山崎
キナバルの雪(庄野英二)	六〇〇	山崎
岩の呼ぶ声(藤木九三) 入札	一五〇〇	山崎
世界山岳百科事典(山と溪谷社)	二五〇〇	山崎
遙かなる末路の尾根(J A C 東海支部)	三五〇〇	山崎
ヒマラヤの真珠(マライニ、牧野文子訳)	一〇〇〇	山崎
山(大島亮吉)	五〇〇	山崎
エベレスト登頂(シブトン、白木茂訳)	三〇〇	山崎
山の思想史(三田博雄)	一〇〇	山崎
シルクロード(深山久弥)	五〇〇	山崎
山の花暦(藤木九三)	五〇〇	山崎
山行(横有恒)	三〇〇	山崎
女六人ヒマラヤを行く(細川沙多子)	三〇〇	山崎
近代日本登山史(安川茂雄)	一〇〇〇	山崎
大島亮吉全集(Ⅰ)・(Ⅴ) 入札	六五〇	山崎
先蹤者(大島亮吉)	一〇〇〇	山崎
アルピニストの手記(小島島水)	二〇〇〇	山崎
優松の匂ひ(小島島水)	三〇〇〇	山崎
山の讃歌(岡田喜秋)	二〇〇〇	山崎
青春の山想(岡田喜秋)	四〇〇〇	山崎

アルプスの三つの壁（ヘックマイヤー） 安川茂雄訳	一〇〇〇
われ北壁に成功せり（芳野満彦）	二〇〇
私の北壁（今井通子）（続共）	五〇〇
山のガキ大将たち（三田幸夫）	五〇〇
穂高星夜（山崎安治）	一〇〇〇
岩登（舟田三郎）	一五〇〇
深田久弥の追憶（追悼委員会）	八〇〇
単独行者の記憶（安川茂雄）	六〇〇
滝谷に逝ける（安川茂雄）	五〇〇
穂高に祈る（安川茂雄）	五〇〇
チンネの星（安川茂雄）	五〇〇
霧の山（安川茂雄）	四〇〇
氷壁に生きる（安川茂雄）	五〇〇
日本アルプス山人伝（安川茂雄）	六〇〇
谷川岳の霧と星（安川茂雄）	五〇〇
孤独なザイル（安川茂雄）	四〇〇
朝焼け（安川茂雄）	三〇〇
回想の谷川岳（安川茂雄）	三〇〇
山に闘う（ランベール 安川訳）	四〇〇
岩壁に闘う（ワルタシムット 安川訳）	四〇〇
山岳浄土（中村清太郎）	二〇〇〇
登高者（大島亮吉）	四〇〇〇
忘れ得ぬ山旅（田部重治）	六〇〇
山があるから（深田久弥）	二〇〇
チベット（多田等編）	二〇〇
山は生きている（今井徹郎）	一〇〇
南極（南極資料保存会）	三〇〇
セントエライアスとマッキンレー（関西登高会）	一五〇〇
青春を山に賭けて（植村直巳）	三〇〇
山岳 四八年 四九年 各二五〇〇	
山岳 五〇年 三〇〇〇	
山岳 五二年 二〇〇〇	
山岳 五七年 六〇〇七七年 各一五〇〇	
岩と雪 一四 一三一 一三七 各三〇〇	
関西学生山岳連盟報告 第四号、五号 各二〇〇〇	

東京農業大学山岳部報告 第二号

甲南山岳部時報四〇周年記念号	八〇〇
日本山岳会学生部年報第一号	二〇〇
アルプ 昭四三〜四八年 摘三五〇〇	
Alpinism No. 1-10 摘一〇〇〇	
山（日本山岳会編）一〜五号 入札価 三五〇〇	
踏跡（防大山岳部）第三号 三〇〇	
The Himalayan Journal, XXV, XXVII, XXX 各一五〇〇	
The Mountain world 1960/61 一〇〇〇	
Newby; A Short walk in the Hindu Kush 一五〇〇	
Tucci; Tibet-Land of Shows-Rebuffat & Olive; Calanques 一五〇〇	
Schmid; Menschen am Matterhorn 五〇〇	
Chapman; Living Dangerously 一五〇〇	
Beruzzi; No Picnic on Mt. Kenya 一六〇〇	
Noyce; The Climber's Fireside Book 一五〇〇	
National Geographic 70-72 各一〇〇	

第七回高所登山委員会

酸素と酸素呼吸器の将来

一九七四年九月十四日、十五日
 △神戸、住友電機工業㈱ 六甲山荘
 △出席者 今西寿雄、前田浩、村木潤次郎、住吉仙也、平林克敏、中島道郎、齋藤惇生、和田豊司、加納巖、佐藤庸三、森正晴（2名川崎重工業）、坂田元記（坂田技研）、金坂一郎、宮下秀樹、原真、中島寛、鹿野勝彦、池沼慧、伊藤行人、三村和男、松本武彦、松井道大、市野和雄、藤井裕久、下山隆己、野村哲也、岩崎忠昭、湯浅道男、安間莊、松村隆広、浜野吉生、高田直樹、塚本圭一、阿部和行、加藤幸彦、木村博、甲斐邦男、田中喜樹、重広恒夫
 谷川岳芝寮の集りで、エベレスト南西壁の計画が話題になったあと、今後のもっとも重要な課題の一つである酸素の問題について討論してみようというところになり、マナスル登山以来酸素の問題を研究しておられる関西支部の方、川崎重工の方々を中心に行いたい、70年のエベレスト登山の酸素担当だった平林克敏さんをお願いして、討議内容から宿舎の手配まですべておこなうとして実施することになった。

今回の目的は酸素に関する基礎的な知識を勉強し、その基本的な考えと、将来に対する方向づけを確認することであり、議題と次第はつぎのとおりであった。

第一日

(一) 酸素と高所生理
 1、人体にとって酸素とは何か
 (イ) 齋藤惇生 生体と酸素摂取量
 (ロ) 運動時における生体の酸素消費
 2、高所生理と酸素 中島道郎
 (イ) 酸素分圧の低下と生体後遺症と酸素維持について
 (ロ) 高所における効果的生理機能維持について
 脳のダメージが一番早い、八千m以上の激しい登攀のある場合の休養地は五千二百m以下が望ましい……等。

(二) 酸素供給機器の概要と今後の課題
 1、現状と将来の展望 平林克敏
 (イ) システムとして見た場合の器具のあり方
 (ロ) 各機器の機能と将来の開発方向

向 ポンベ・レギュレーター・エコノマイザー・マスクの連結方法、開放式・閉鎖式マスクのメリット、デメリット等。
 2、工業技術面から見た酸素機器 佐藤庸三（川重）
 高圧ガスの法的規制、ガス洩れは取扱いや使用法に欠陥があるのでは。
 3、素材面から考えられる将来の方

向 ヘルメットはエコノマイザー内蔵型の特性等、または未完成であるが今後の開発課題である。（この装置はこの程日本山岳会で特許権を取得した。）

(三) 特殊酸素器具
 1、液体酸素使用の可能性について 和田豊司
 今後の方向を示唆する液体酸素の問題（主として位置、睡眠用）水力発電による液体空気、超断熱法の話など、今回ももっとも興味をひく課題の一つであった。

2、後継者からの酸素供給等 加納巖
 まだ難点が残っている。現地の酸素の管理システムの確立等。
 夜十一時半より懇親会。差入れのアルコールに酒盛が午前一時、二時と続いた。久しぶりに出会った方も多く、酒も話も盛大にはずんだ。

第二日
 3、酸素発生器と酸素テント他 住吉仙也
 効率が悪く実戦向きでない等。
 四 各器具の問題点と対策
 平林、住吉、中島さん等を中心に座談会。参加者全員による熱心な討論が屋過ぎまで行われた。
 以上の内容の詳細については省略するが、一部有志の方がレポートにまとめておられるので、非常に重要かつ、興味のある問題ばかりなので、機会をみて別に発表させて貰いたい。
 人数的に少し多過ぎた感もあったが、内容的に盛りだくさんであり、随分と難しい話にもなったけれど、確かに真剣に考えなければならぬ点を多く含んでいた上に、力の入った会議であった。今西支部長始め、村木さん、金坂さん等最後まで熱心に討議に加わって頂き、充実した会をもって非常に嬉しく感じた。（宮下秀樹）

和書目録完成!!
 図書室所蔵の和書約四、〇〇〇冊を収録した目録が完成致しました。
 一部三五〇円（送料共、切手代用可）です。早めに事務局までお申し込み下さい。 図書委員会

第 17 回
も み じ 報 告

山 本 朋 三 郎

東海メカボリスの森、として最近評判になっている、南アルプス南部の山麓深い二軒小屋東海バルブロッヂで十七回のもみじ会を開催した。八十九歳の松本善二氏をはじめ、日高信六郎、野口末延、山崎金次郎、鶴岡元之助、佐藤佳年、滝浪善一、中河与一の七十歳以上の諸氏もほとんど毎回参加され、若い連中と山行も一緒にされる元気づけである。

九日の市役所前集合には突然用事ができて参加できないと、わざわざ静岡までこられて不参加の連絡をされる麻生武治氏の折目正しいなかなかできぬ態度に、さすが明治の方だとの申しきり。無責任の若者の多い今日、貴重な存在である。若き会員へのひとつの教育である。

参加者の県別も毎年増えて、東京、横浜以外で、山形県、千葉県、愛知県そして遠く鳥取県からも参加された。今年の特長は、日本山岳会の青年部会の若い諸君が、満員締切りでだめだと断ったがぜひ集会係として支部活動を研究したい、と熱心に東京から車で直通。西奥、福島、若い会の役員が地方支部の在り方を研究したいとの態度は大いに買った。中央のお偉い方よりた。

もうひとつの今年の特長は、隣県の山梨支部員が個人の資格ではあるが、翌日のコース案内で協力してくれたことである。山村正光、前田清子、小林

基子の諸氏。

各支部がお互いに協力、懇親して行くよう、本部はどしどし予算を大いにフン発してもらいたい。

もみじ会は日本山岳会々員が平等の立場で行っている積りであり、長幼の序は厳として守るが、これ以外私的なものがまはす許さず、清掃作業も支部会員と同様をお願いしている。今年も会場はナメたようにキレイにされ、さすが日本山岳会だと東海バルブさんからホメられた。酒もほどほどで行儀よく、女性十四名のコースもたのしい山登りのバック・ミュージックであった。

翌日は、大半の参加者が転付峠越えで身延へ、一班は千枚岳登山に、もうひとつの班は寸又峽へと出掛けた。

参加者 日高信六郎、麻生武治、松本善二、佐藤佳年、中河与一、野口末延、山崎金次郎、鶴岡元之助、松本龍吉、近藤信行、近藤藤、小原晴子、沼倉寛二郎、浜野正男、網蔵志朗、登坂信雄、松本慎太郎、小林重一、林稔、松家晋、山野井武夫、坂下心一、朝井一男、渡辺嘉男、矢沢義弘、川北仁、名見那津男、藤江幾太郎、齋藤かつら岡部みち子、野村千代子、江福裕子、小林基子、前田清子、渡辺弥生、小野昌子、建石八重、神田チヨ、沢田栄平、西奥亮平、福島健一(以下静岡支部)

山本朋三郎、岩永安雄、牧野衛、滝浪善一、滝浪正志、海野利道、長島吉次、荻野恭一、川端信治、石間信夫、山口亮、久保田保雄、小林清彦、田辺恵造、望月俱子、鶴見敏彦、水野公男、村田二郎、森川英雄、原田茂、合計六十四名、協力 静岡市体育課、静岡市井川支所、東海バルブ井川山山事務所、長島建設、大井川鉄道、讃岐荘

(四九・一一・一一)

紅葉の雲仙で秋季例会

熊 本 支 部

恒例の秋季例会はさる十月二十六、二十七日の両日、紅葉に映える長崎県雲仙岳で開いた。二十六日夕刻まで宿舎の南高来郡小浜町小地獄丸登屋旅館に集合してもらったが、参加者は七名。

秋はいろいろと行事の多いシーズンであり、会員の中にも結婚式や勤務先での行事の都合もたつて修学旅行率の数字もあつて、これまでの例会参加者数からみて会員の出席は少なかった。しかし、山の方は中腹から頂上にかけて紅葉は見ごろであり、安定した秋日和に恵まれて、参加者はいちように自然の美を賛美して下山した。そうした時期でこの観光地も同じであるが、車のラッシュは大変なもの、仁田峠の駐車場は混雑し、有料道路は車の列で夕方まで混み合っていた。

会場の小地獄というところは、雲仙のホテル街から南へ約一km下ったところにある、昔から素朴な温泉場であったが、今は国民宿舎やユースホステルができており、この谷間にも時代の波にのり近代建築物ができたと思えたが、やはり昔ながらの旅館が三、四軒残っているに懐しく思った。私たちの泊まった旅館もその中の一つであり、今これら旅館はどうしても上のホテル街に押されて、主に貸切バスの従業員の泊り場になっているようである。

当夜の懇談会は最近行かれた三谷文部長の欧州旅行の土産話をきき、とくにアイガーをはじめスイスや欧州各地のステイターをみせてもらい、夜おそくまで歓談した。

翌日は仁田峠から普賢岳(一、三六〇m)へ登り、深紅に映える紅葉を觀賞しつつ、風穴、鳩穴をみて下山、仁

田峠から田代原を経由、一部工事中の新道を経て国見町へ下り、多比良港で解散した。なお、会員本田誠也氏に地元での宿舎の手配、翌日の登山行動等にお世話を願ひまして紙上をかりてお礼を申し上げます。

図書室(便り)

(昭和49・11)

新刊図書受入報告

水野公男氏寄贈
(1) 水野公男著『等三角点』昭和49
(2) 三笠書房寄贈
(3) 安川茂雄編『風雪の薬師岳』昭和49
(4) 朝日新聞社寄贈
(5) 『深山久弥山の文学全集Ⅶ ヒマラヤの高峰(上)』昭和49
(6) 講談社寄贈
(7) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(8) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(9) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(10) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(11) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(12) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(13) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(14) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(15) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(16) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(17) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(18) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(19) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(20) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(21) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(22) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(23) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(24) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(25) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(26) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(27) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(28) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(29) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(30) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(31) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(32) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(33) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(34) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(35) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(36) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(37) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(38) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(39) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(40) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(41) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(42) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(43) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(44) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(45) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(46) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(47) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(48) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(49) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(50) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(51) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(52) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(53) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(54) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(55) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(56) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(57) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(58) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(59) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(60) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(61) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(62) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(63) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(64) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(65) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(66) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(67) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(68) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(69) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(70) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(71) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(72) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(73) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(74) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(75) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(76) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(77) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(78) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(79) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(80) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(81) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(82) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(83) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(84) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(85) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(86) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(87) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(88) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(89) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(90) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(91) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(92) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(93) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(94) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(95) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(96) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(97) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(98) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(99) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49
(100) 『今西錦司全集 三 ヒマラヤを語る・カラコルム』昭和49

(1) 山村民俗の会『あじな』No. 143 (49-10)
(2) 越後山岳会『越後』No. 4 (49-10)
(3) 日本地図資料協会『古地図研究』No. 56 (49-10)
(4) 京都山岳会『京都山岳』No. 535 (49-11)
(5) 日本ヒンズー・クシナ会議『HKT ニース』No. 15 (74-10)
(6) 兵庫山岳連盟『兵庫山岳』No. 90 (49-10)
(7) 日本ヒマラヤ山岳協会ラムジエンヒール委員会『ラムジエンヒール』No. 2 (49-11)
(8) 東京野歩路会『山嶺』No. 535 (49-11)
(9) 日本自然保護協会『自然保護』No. 149 (74-10)
(10) 日本山岳協会『登山月報』No. 65 (49-8)

(11) 大町山岳博物館『山と博物館』Vol. 19, No. 10 (74-10)
(12) 日本登山協会『山と雪』No. 197 (49-10)
(13) 雑誌
(14) 『アルプ』No. 201 (74-11)
(15) 『岳』No. 330 (74-12)
(16) 『岩と雪』No. 40 (74-12)
(17) 『山と溪谷』No. 435 (74-12)
(18) その他
(19) 京都山岳会寄贈
(20) 『坂道千香子さんをしのぶ』(京都山岳)
(21) 高平信雄氏寄贈
(22) 泉州山岳会『昭和48年度海外登山報告』ローガン峰縦走・サンフォード峰試登(葛城・特別号)昭和49
(23) 日本信雄氏寄贈
(24) 日本山岳会『山』三〇一〜三五〇
(25) 1. 『Die Alpen』50. Jahrg. Quart. 3.
(26) 2. 『Die Alpen』September '74.
(27) 3. 『Die Alpen』August '74.
(28) 4. 『The Alpine Journal』Vol. 79, No. 323, 1974.
(29) 5. 『Alpinismus』'74-9 & 10.
(30) 6. 『Appalachia. Bulletin』Vol. 40, No. 10, '74-10.
(31) 7. 『Der Bergsteiger』'74-9.
(32) 8. 『Chicago Mountaineering Club. Newsletter』Vol. 28, No. 2, '74-10.
(33) 9. 『Climbing』Sept./Oct. '74.
(34) 10. 『Club Andino Peruano. Bulletin』No. 4
(35) 11. 『Rivista mensile』Anno. 95, No. 5, Maggio '74.
(36) 12. 『UIAA. Bulletin』No. 61, October '74.
(37) 第七回図書交換即売会におおぐの寄贈図書および購入図書を左記のとおり報告致します。

寄贈図書

福田宏年氏寄贈

- (1) 四手井綱英著『もりやはやし』中央公論社 昭和49
- (2) 金子民雄著『中央アジアに入った日本人』新人物往来社 昭和48
- (3) 白川義員著『山岳写真の技法』理工学社 昭和48
- (4) 堀淳一著『地図を歩く』河出書房新社 昭和49
- (5) 藤岡謙二郎著『日本の地名』講談社 昭和49
- 松田雄一氏寄贈
- (1) 愛知県山岳連盟『ダウラ・ヒマール遠征 '65』昭和42
- (2) 内藤敏男著『エベレストへの道』日本放送出版協会 昭和46
- (3) ノーマン・ハーディー著 神原達・牧野登共訳『ネパールの高地にて―シエルパとともに―』明文堂 昭和35
- (4) ウォーリー・ハーバート著 木村忠雄訳『北極点を越えて―英国北極横断探検隊の記録―』朝日新聞社 昭和45
- (5) 日本山岳会『山』(101-1250) 報告』昭和43年度
- (6) 日本山岳協会『海外登山技術研究会報告』昭和47年度
- (7) 日本山岳協会『海外登山技術研究会報告』昭和47年度
- (8) "Annapurna to Dhaulagiri: a decade of mountaineering in Nepal Himalaya 1950-1960" by Harka Gurung. His Majesty's Government of Nepal, 1968
- 三田幸夫氏寄贈
- (1) 尾崎喜八著『あの頃の私の山』二見書房 昭和46
- (2) 秋谷豊著『岩と雪の歌』二見書房 昭和49
- (3) 『ケルンに生きる―遭難の手記―』一〇五 二玄社 昭和34〜37

(以下次号)

諸兄の会津入りを願って日中飯森山を紹介しします。
(49・10・1)

交通 国鉄利用—会津若松下車、磐越西線乗替喜多方下車、日中線乗替熱塩下車
会津バス喜多方駅前発日中温泉行乗車、湯元屋旅館前下車終点
登山口 日中温泉

丹沢集中登山印象記 ①

(第三一三回現地小集会)

河野 幾雄

こんどの一行が大森野駅前で解散し、私が駅の方へ歩きかけると、うしろから山本良三君が追いかけてきた。山本君は会報の編集委員である。「会報にのせたいから、今日の印象記を書いてくれないか」という。「とんでもない」と断ると「いや、たつた今、山崎さんと相談した結果、お願いすることに決めたので」と、うしろの方を振り向く。うしろには『日本登山史』の山崎安治先生がニヤニヤ笑いながら立っておられ、お願いするといわぬばかりに頭をさげられた。駅の手前のうすぐらいところだったから、ほかの人は誰も気がつくまいが、私の顔は真赤になり、頭には血が逆上してくるのを感じた。そのわけは、今日の一行の中で、たった私一人だけがひどいお荷物になったのを、とたんに思い出したからである。

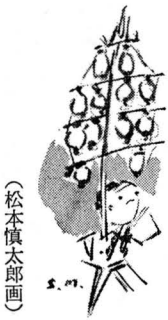
オンパ、尾根 徒歩上り五時間 下り三時間 健脚者 個人差あり
温泉 日中、熱塩温泉 三、五〇〇円より
おみやげ 弥次郎こけし
問合せは 福島県熱塩郡納村役場観光課または福島県会津若松市山鹿町二ノ二五会津山岳協会事務局

山岳史学者にまで頭を下げさせては断るわけにもゆかず、恥を忍んでお引受けした。この山行の通知が山岳会からきたとき、私ははじめて参加した三年前の川乗山集中登山の、楽しかった一日を憶いだした。その時私は老人(子供向)とカッコーのついた、大丹波川廻行A班に加わった。子供向と書いてある以上、家族もつれていって良いのだろーと思ひ、息子を同伴した。その頃、息子は、大学の教師をしていたが、山などに登った経験がなく、登山に関する限り、子供も同然であった。途中で自己紹介があった時、年の割に若くみえたらしい、リーダーグループの一人から「なああーんだ。高校生かと思つたら」と声があがり、一行がワーッと爆笑した。これですっかり一行と打ち解けてしまった。

子供といえ、わがA班には一歳の赤ちゃんもいた。山きちの若い親父に手をひかれてヨチヨチ歩いてくる。老人(子供向)の大丹波川コースといえども、途中には丸木橋もあれば、岩壁につるさがつた棧道もある。そこへくると、親父は一歳をヒョイト抱きあげて、リニックの上へ乗せ、軽く通過する。通過し終ると、すぐまた下す。驚いたことに、獅子口小舎から上の、あの急坂さへひとりで歩かれて、とうとう頂上まで登ってしまった。いざお弁当という時になって、親父がリニックから取りだし、それをのべていると、何と、それは哺乳瓶であった。また、川乗山の他の班には、スケッチ班があった。山里男先生の指導をうけながら、途中、画をかきかき頂上へ登ってき、頂上へ着いたときはわれわれと一緒に下った。下山も一緒だった。帰りの電車は満員詰めで、吊革にぶら下っている、私のうしろで大きな声が聞える。それもいかにも残念そうな声で、「電車がきたのであわてて乗ってしまったが、駅でビールを買うのを忘れた」「そうだ。……ない」となる。ますます飲みたくない「声」につられて、私がうしろを振り向くと、その中の一人は、山里先生ではないか。その時私のリニックには、お守り代りのウィスキーがあった。これは昔の山の一本の中に、登山の必須携帯品として、油紙、ローソク、マッチ……の最後にウィスキーがあり、注がついて「本品は意もて用ゆるものに非ず。山中疲勞して危険迫りたる時、少量を水に割りて用ゆれば疲労回復に神効あり」とか何とか書いてあったのに感激し、私はいつもお守りの代りとしておく。「山里先生!私、さっき頂上でお逢いしたA班の者ですが、ウィスキーでよろしければ少しあります」と申し上げると、同じ会員だということ安心のためであろう。先生、天眞爛漫に喜ばれて「そりゃ有難い。頂きます」とおっしゃり、私も断られず、面に面を施すことができた。それもこれも、山岳会集中登山の楽しい思い出である。

楽しいといえ、土曜会がある。実は私は一度も行ったことがないので、詳しいことは判らないが、人の話によると、こんな楽しい会合はないのだそうである。会員ならば誰でもよくて、全く制限はないという。終戦直後から続いている、開設主唱者の一人である神谷恭先生の名をとって、一名「神谷バー」という会である。「カミヤバー」というのは、戦前、浅草にあった、電気ブランで売られた大衆酒場の嗜矢である。恐らく、ここから、この別名が生れたものであろう。土曜日の午後ならいつでもよく、自分の好きな時間に行き、勝手に帰るのだそう。場所には山岳会のルームで、そこにおいてあるウィスキーを一杯百円おいて、自分でいきて、飲みながら山の話を中心に、よもやまの世間話に興ずるのである。なるほど、きいただけでも楽しくなる。

集中登山の方は、この二、三年來はじまされたものらしい。これは、ひとえに、神崎忠男君という、熱心な集會委員長が出現したお蔭である。われわれ会員にとって、こんな有難いことはないが、企画する側の立場からすれば、なにか事故でも起ればただでは済まないから、ささるるの折れる仕事に相違ない。とくに委員長は神崎君の心勞は察するに余りある。そして神崎君は、手伝いに、若い有能な、現役の学生山岳部員を使う。この学生達は、いづれも将来を囑目された、いわば南壁の候補者であり、いざとなれば腕の持ち主ばかりである。その金の卵をつかまえて「学生!学生!」と名前も呼ばず、呼び棄てにして、コキ使う。かたわらでみていると、気の毒になつてしまふ。多達からすれば後姿をおがみたような多勢の金の卵に守られて、低いヤブ山に登るのであるから、安心を通り越して、もったいない話である。これも日本山岳会でなくては考えられない。豪華絢爛な山行である。



(松本慎太郎画)

駒ヶ岳から乳頭山へ縦走して山の花をみにいったという涙ぐましい難行をした。先日私が知り合いの登山具店へつれてゆき、リニクサックからはじめて(リニク)に近頃はいろいろの新型がある)ラジウス、ビトン、カラビナなど百種類にわたる山の道具を一通り見せてもらい画をかく参考にした。こんども、時期は悪いが、丹沢でも何かの役に立つこともあろうと思いつて行くことにした。

そこで新菜沢である。あとで判ったことだが、これは新茅ノ沢の誤植であつた。いまさらこの誤植がうらめしい。私も丹沢の谷が、どれも一筋縄で行かぬことぐらいは漠然と知っていた。しかしこの名前を見たとき「山菜の一杯生えている、新しく開かれた沢沿いのススキリした道」と勝手に解釈した。まさか、岩登りがでてきょうとは夢にも思わなかった。それというのも、別にチャンとクライマーコースというのが書いてあるからだ。新茅ノ沢なら、今までも滑落事故で多くの死傷者がでている。新という字で、これが新茅ノ沢の誤植であることに早く気がつくべきであつた。それを気がつかない自分の阿呆さ加減にあきれたが、気がついたときは身がすでに新茅ノ沢にあつた。後の祭りであつた。後の祭りもう一つある。

(続く)

六月の火打山

松 家 晋

妙高高原駅に朝早く着いた私達は始発バスを待つておられず、タクシードで笹ヶ峰牧場へ向かった。顔ぶれは、いまもって盛んに山歩きを続けておられる永年会員の野口末延氏、前静岡支部長の牧野衛氏、それに私の三名である。杉野沢を過ぎ、スキー場を登りつめてしばらく行つたところ、突然、車の前方が開け火打山、焼山など、これから目ざす頸城山群が姿を現わした。今年例年になく雪が多かつたせいか、これらの山腹には、まだ予想以上に雪を残しているのがみられる。笹ヶ峰牧場に着くころには前夜の雨もようの天気も回復し、青空が広がりはじめていた。爽やかな朝の高原にカッコーやホトトギスが、遠く近くしきりに啼きかわす。心が洗われる思いだ。

私達は無人小屋のかたわらで、柔らかな朝日を浴びながら軽い食事をとつたのち登山道に向かった。道端の湿地では水芭蕉がもう大きな葉をひろげていた。新緑のブナの木を行き、雪とけで増水した黒沢の谷を渡り、登りにかかる。道端にはイワカガミやエンレイソウが咲いている。

十二曲りの急坂を登るにつれて、雲行きが怪しくなり、ガスが流れはじめた。そして、ついに雷鳴をとまなつた雨に見舞われてしまった。私達は急いで雨具は取りだしたが、雷鳴対策にはこれというものが無い。ヒヤヒヤしながら登り続ける。急坂を登りつめるとシラビソの原生林に入り、まだ深い残雪に覆われた林間を尾根根に登つて行く。やがて、開けた尾根にでたころ

には雷雨も止み、ガスも切れて明るくなつてきた。そして前方には火打山、焼山が一段と大きく構えており、手にとるに近い。

ここから、黒沢岳の西斜面を巻いて行くこと、やがて前方の雪原に三角屋根のヒュッテが見えてきた。このヒュッテは、三年前に建設されたばかりであり、三階建の実に瀟洒な山小屋である。ヒュッテに着いて間もなくまた雨になった。ヒュッテには、一週間前に山に入ったばかりという感じの若い小屋番の青年がいて、私達を気持よく迎えてくれ、食事のことまで面倒をみてくれた。

翌朝、目を覚すと外が意外に明るい。ヒュッテの窓を開けると見事に晴れているではないか。そして、高妻、乙妻などの戸隠連峰は、もう赤く染まりはじめていた。私達は、軽い朝食ののち、サブザックで目的の火打山頂へ出発した。高谷池や天狗の庭付近にある池塘は、いづれもまだ残雪の下にあって姿をみせていない。雪の消えようの斜面にはシラネアオイやシノウヅウ、ウバカマが咲き、道端ではミネザクラが蕾をつけ、ナナカマドの芽が大きく脹らんでいる。

登るにつれて展望はますます開けていく。日本海側はすっかり雲海に覆われているが、内陸側はよく晴れており、近くの妙高山、右へ黒姫山、遠くに八ヶ岳、南アルプス、手前に戸隠連峰、そしてボリニウムのある北ア連峰と大きく波打っている。

静岡支部の牧野氏は、黒姫山越しのほかに雲海の上に現れた富士山を見落さない。自宅の庭の山が見えたとききげんである。事実、梅雨時、日本海側の山頂から太平洋側の山々までの展望に恵まれるのもめったにはなかなう。私達は山頂近くに残る雪の斜面をキックしながら登りつめて、山頂に立

った。そこには不必要な指導標などはない。しかも、三角点と小さな不動尊が一基置かれていただけの、サッパリした山頂であつた。

山頂の西側には焼山が特長のある山容をみせている。その山頂の北斜面あたりに白い蒸気がでているのがはつきり認められた。果てしなくひろがる山なみに、展望亭真の得意な野口氏は周囲にカメラを向けたり、双眼鏡で過去に歩いた山々を確かめておられる。私達は当初、尾根根に焼山まで足をのばす予定だったが、雨飾山から焼山にかけて、急速にガスが発生しはじめてのでこれは断念した。

火打山頂で、一時間半近くも山岳展望や写真撮影で時間を過ぎたのち、私達は屋敷谷に再び高谷池ヒュッテに帰着した。屋敷谷のち、天気はよいし時間もあつた。黒沢ノ池方面への散策もよからうということと、身軽で出掛けすることにした。ヒュッテの裏のシラビソの原生林のなかはまだスキーがでるほど雪が多い。これを東へ行き、黒沢岳の北斜面の鞍部を越え、眼下に黒沢の湿原と妙高山の外輪山が開けてきた。斑らな残雪と針葉樹のコントラストがいかにエキゾチックな雰囲気をもっている。

雪の急な斜面を下つて、湿原のはずれにある黒沢ヒュッテまで行き、付近の山について小屋番から話を聞いた。五月の連休にはこのヒュッテも、ヘリコプターで入山したスキー客で賑わつたそう。帰りは私達は尾根につけられた夏道を伝つてのんびり引き返す。牧野氏は周囲の山肌に見えわたる面白い雪形を発見してはわれわれに注意を向けさせる。夜は小屋番の手料理になる野趣に富んだ夕食に舌鼓を打ち、山の話に夜が更けた。翌日もまた天気に恵まれた。私達は前夜のうちに下山は燕温泉にすることで一致していた。

それならば、とくに早立ちする必要もないだろうということで、朝のうち、ヒュッテ周辺で写真撮影や高山植物の観察に時を過ぎた。そして、十時過ぎに高谷池ヒュッテに別れを告げた。

途中、できれば黒沢ノ池から、妙高の外輪山まで往復してみたいと思つたが、濃いガスが山頂を包みはじめたので、黒沢ヒュッテの庭で昼食をとつたのち、そのまま下山することにした。道は大倉山の北斜面を巻いて下るが、濃いガスのため、広い雪渓を横ぎるたびに、道の継ぎを発見するのに苦労する。

シラネアオイやヤシオツツジが咲き乱れる三ツ峯を通過して間もなく、外輪山のなかにある燕新道へ一気に下るが、残雪が溜水を押し倒し、道をふさいでいるため実に歩き難い。燕新道に合流して、なおいくつもの雪渓を渡つて下り続けると、大倉沢にでた。少し増水していたが、これを飛び石伝いに対岸に渡る。野口、牧野両氏はともに明治生れであるが、実に健脚であり、かつバランスのよいのには驚かされる。沢を渡つてからは残雪もすっかりなくなり新緑の気持のよい山道を下り、夕方、燕温泉に下山した。私達はここで三日ぶりに山旅の汗を流し、くつろいだ一夜を過ごした。

今度の山旅は天候に恵まれたほか、余裕のある日程であつたため、残雪の山を心ゆくまで楽しむことができた。翌日は妙高高原駅にでたのち、私はそのまま帰京し、野口、牧野両氏は所属されている霧の旅会の懇親会に出席されるため戸隠小舎へ向かわれた。

(筆者注)

これは昭和四十九年六月六日より九日までの紀行をまとめたもので、このあと、七月二十八日未明、焼山が突然噴火したため、火打山頂は、九月十五日現在、登山禁止になっている。

華練登山団の来日に
寄せて

沼倉寛二郎

十月二十二日(キャセイ航空、一七・二五発おくれの二十時発)雨けぶる肌寒い羽田より帰国の華練登山団洪隊長外十三名(蔡团长十月六日帰国由)を私たち三名(小野利次、渡辺弥生、沼倉)見送ることができて幸じて山岳会の名目がたつたことと思う。このたび蔡团长外十四名の中華民国山岳協会の訪日登山には事情から正式に山岳会に招待することができなかったことは止む得なかったにせよ、先般の歓迎会の通知洩れのため出席できなかった会員があつたと伺っている。会員の方には義理でどうしても出席しなかった方々があつたかと思う。彼等の帰国に当って見送りの際、山岳会に尋ねてもはつきりしないことはなほ遺憾でならない。

台湾に行かれた方はとくとご承知のことと思う。彼等は信義にいかんにか、おわりのこと。(その節私たちが三田前会長外招待登山に曲りなり義理をはたしてきだが)今回は事情があつて招待の形式をとれなかったのであるから、せめて歓迎会だけでも多くの方々で迎えて差し上げたかった。

これは余談であるが見送りに行ってわかつたことである。忙しい歓迎会のとき蔡团长外十四名に差し贈ったネクタイなど非常にいい思いつきだった。彼等は山岳会々長の贈りものとして受けとめられていた様子である。これは金銭的になるので甚だ申しにくく恐縮のことであるが、これなどは一昨年台湾に行った三田前会長外十四名の内出席の八名に差し歓迎会の何がしの不足金として要求されたものと思われる

が、山岳会々長として贈つたものか(一応用意しておくか)はつきりしておくのが相手に対する礼儀かと思われるのであえて申添える次第です。空港での雑談から判かつたのである、彼等はあらためて個人の贈りものと気付いたらしく私たちに差しお礼をいっておられたことを付言したい。(十月二十二日)

インナーラインの
制限緩和

八月一日付のヒマラヤンクラブの通知に、インナーラインの制限緩和と題してつぎのようなニュースが掲載されているのでお知らせする。

インド政府内務省は、最近 Jammu and Kashmir, Himachal Pradesh, Uttar Pradesh の各州を訪れる外国人に対し、インナーラインの制限を大巾に緩和すると発表した。

この通達によれば、Himachal Pradesh 州の Kinnaur, Lahul, Spiti 地区、Uttar Pradesh 州の Uttarakashi, Chamoli, Pithoragarh 地区はもはや制限されないことである。今回オープンされた地域には、Jammu and Kashmir 州の Kishtwar, Nun Kun, Leh とその周辺を含む Ladakh 地区も含まれており、Himachal Pradesh 州の Upper Parvati Valley, Shigri Glacier, Utter Pradesh 州の Badrinath, Kedarnath, Valley of Flowers, Pindari Glacier, Trisul, Nanda Devi も含まれている。

前記地域についての改正されたインナーラインの詳細については、海外にある India Mission インド航空の事務所に連絡がついているのでコンタクトされたいとのことである。(松田)

図 書 紹 介



かんあおい

山下 一夫著

れたカットは、図鑑などではみられない絵画的タッチの妙があつて、直感的に「ああ、あれだ」とわかる。このほかにエーデルワイス・クラブの会報に執筆した文章などもあるが、これにも植物に関するものが多く、本書全体を通じて一四三種の植物がカットとして載っている。

書名となった「かんあおい」については、滋子未亡人が書き添えた文中に、「かんあおいは山下一夫のこよなく愛した植物の一つだった。山歩きに出かけた帰りに、かんあおいの株を大切に持って来て庭の片隅に植えるのが常だった。……地味で控え目で、辛抱強い花が夫が愛した気持が判るような気がした」とある。

一九七四年八月、茗溪堂発行、A5判三〇三ページ、カラー別丁二葉、定価二、六〇〇円。(今井雄二)

「登高行」第十七号

慶応義塾体育会山岳部

十年ぶりに登高行第十七号が発行された。第十六号はヒマルチュリ遠征特集号としてだされ、部の動向や記録などすべてはぶかれていたが、第十七号は従来の部報としての形式をととのえた部厚いものとなった。

昭和三十一年度から四十八年度まで十七年間の年次報告を巻頭におき、以下「わたしの法学道」(峯村光郎)、「大戦中のルーム」(谷口現吉)、「山登りを考える」(内藤健伍)、「エベレストの想い出」(宮下秀樹)、「ルームの山登りを考える」(山瀬則夫)、山行報告、紀行、追憶、遭難報告、行事報告、研究、密林、記録となっている。宮下氏の「エベレストの想い出」は、仲間への報告だけにかなり赤裸々に一

九七〇年の登山の内幕にふれており一読の価値がある。

遭難、反省、また遭難、反省というパターンは、あえて慶応だけに限らず早稲田なども同様で、最近の学生登山のむずかしさを如実に物語っている。山行報告は、笠・奥穂極地法登山、ニュージランド遠征、バウダー峰、メントーサ峰、冬の北鎌尾根より北穂と五つの登山が報告されている。

研究は大森弘一郎氏の「実体撮影及び空偵の意義と可能性」で、赤青のメガネを用いた立体写真が付されており、ヒマルチュリ、カンチエンジュンガ、カンパチュニ、エベレストなど十六枚のヒマラヤの高峰が浮き上って眺められる。

今度の号の大きさは縦二十四cm、横十八cmで従来の号より大型となっているが、全巻本棚に並べるとこの号だけってばつて具合が悪い。これはなんとかしてほしかった。

昭和四十九年七月慶応義塾体育会山岳部発行、四〇八ページ、写真多数、一、〇〇〇部限定、頒価五、〇〇〇円。(山崎安治)

明けて

おめでとうございます。

編集委員一同

昭和五十年一月二十日発行

113 東京都文京区湯島一六六一

利根川商事株式会社

発行者 今 西 錦 司

編集代表 山 崎 安 治

(813) (二八六代表)

東京都赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技 報 堂

茗溪堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291) 9442振替東京24723

かんあおい

山下一夫著 <A 5判>定価2,600円

遙かなる未踏の尾根

マカルー1970年
日本山岳会東海支部
<B 5判430頁・カラー64頁>定価4,800円

シブトンの自叙伝 未踏の山河

大賀二郎・倉知 敬訳
<A 5判440頁>定価1,900円

山に忘れたパイプ

藤島敏男著 <菊判584頁>定価2,500円

森林・草原・氷河

加藤泰安著<A 5判482頁>定価1,500円

山の古典と共に

大島堅造著<四六判280頁>定価1,500円

雪山・藪山

川崎精雄著
<A 5変型判340頁>定価1,200円

我がスキースクール

麻生武治著<B 6判388頁>定価3,400円

山 岳

日本山岳会編
<A 5判>
67年 2,500円
66年 2,300円
65年 2,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
総索引 1,000円

山で唄う歌1集・2集

戸野 昭・朝倉 宏編
<A 6判126頁>1集240円・2集280円

屋久島・美しい豊かな自然

赤星 昌編 <B 6判202頁>定価480円

日高山脈

北大山の会編
<菊判362頁>定価2,200円

原野から見た山

坂本直行画文集
<B 5箱入布特製本>定価4,200円

雪原の足あと

坂本直行著<B 5判206頁>定価2,800円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖
<A変型208頁>定価3,600円

いろいろばた

南会津山の会
<B24どり判320頁>定価1,900円

すこし昔の話

初見一雄著<四六判400頁>定価1,200円

ブータン感傷旅行

小方全弘著 <菊判280頁>定価980円

登頂ゴジュンバ・カン

高橋 進編 <A 5判350頁>定価900円

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ヶ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買いやすい
山の店

●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店

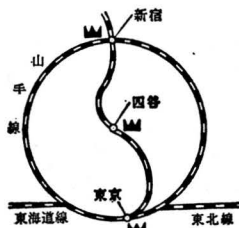
山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38-9

片桐 盛之助

電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店



山友社 **たかはし**

なるべくなんにも
持たない方がいい
けれど、どうしても
要るものがある。
なにしろ人間ですから
そして登山ですから

どうしても必要なものを
をこしらえてみる
ま責任はもっています

かたろぐシンテイ
でんや 281-28456
中央区・八重洲4の1

秀山荘

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2-1
PHON: 271-7686・1718

登山用具の専門店

好日山荘

東京都・中央区銀座3-5-7 (561)3600・(567)9031
東京都・中央区銀座3-4-6 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上1丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・東崎町1-4 (28) 34440

